

## 「沖へ漕ぎ出せ」

ルカによる福音書 5:1-11

先週は、ルカによる福音書の4章16節以下の記事を通して、イエスさまが、生まれ故郷のナザレの会堂で、最初の説教をされたことを学びました。その説教は、預言者イザヤの言葉を引いて、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」という内容のものでした。つまり、イエス・キリストがこの世に来られ、神の国の福音を述べ伝え始めたことにより、神の国、神さまの支配は始まっていると宣言されたのです。預言者イザヤが予言したように、イエスさまは「貧しい人々に福音を告げ知らせ、捕らわれている人々に解放を、目の見えない人々に視力の回復を告げ、圧迫されている人に自由をもたらし、すべての人に主の恵みの年を告げ知らせた」のです。

しかし、イエスさまはその神の国の福音(神さまの愛と恵みの知らせ)を人々に伝えるのに、お一人ではなさいませんでした。どの福音書においても、イエスさまは、宣教の開始と共に、弟子たちを選び、弟子たちと共に行動されたことを記しています。イエスさまが召された弟子たちは全部で12人という、少ない数でしたが、イエスさまはその一人一人をお選びになり、彼らにも福音宣教の務めを託されたのです。その弟子たちは、必ずしも優れた才能や能力をもった人々というわけではなく、漁師であったり、取税人であったり、熱心党员であったりという、ごく普通の人々でした。イエスさまは、どうして、そのような弟子たちを選ばれたのでしょうか。福音書で見る限り、その弟子たちが、特別、イエスさまの宣教の業に大きな役割を果たしたというわけではありません。むしろイエスさまの足を引っ張ったり、イエスさまを見捨てたり、裏切るような結果になったりしました。イエスさまは、神の御子として、お一人でも父なる神さまのみ心を伝え、神さまの御業を広めることも出来たはずですが、にもかかわらず、敢えて弟子たちを選び用いられたことには、深い意味があったのです。

それは一つには、弟子たちを神さまの御業に参加させることによって、その深い恵みに共に与らせるためであったと考えられます。福音は、人ごとのように外から眺めたり聞いたりしているだけでは、自分のものにはならないのです。身をもってイエスさまに従い、イエスさまの労苦を共に担うことによって、自分のものとなるのです。もう一つの理由は、イエスさまは、その宣教の業をご自分の生きている間だけではなく、後々の時代にまで継続して担ってもらうことを必要とされたからだだと思います。つまり、弟子たちは、イエス・キリストと共に歩むことにより、主の救いの恵みにさらに深く与り、その主イエス・キリストの御業を後々の時代にも継続して証ししていく必要があったのです。弟子たちの存在は、後の「教会」の原型なのです。

イエスさまは、弟子たちとその後の教会を通して、神の国の福音を、世の全ての人々に告げ知らせることを望まれたのです。そういう意味で私たちは、弟子たちに託された使命と役割を、教会に託された使命と責任として受け止める必要があるのです。

今日の聖書の箇所は、イエスの最初の弟子となったシモン・ペトロがイエスさまから招かれ、弟子として主に従うようになった時の記事です。イエスさまが朝早く、ゲネサレト湖畔(ガリラヤ湖畔)に立っていると、大勢の群衆が、神の言葉を聴こうとしてその周りに押し寄せてきたのです。貧しい人々、病や障がいを負う人々、様々な重荷を負って苦勞している人々が、イエスさまの語る神の国の福音に慰められ、あるいは癒されて、その評判がガリラヤ地方に広まり、大勢の人々がイエスさまの周りに集まるようになったのです。イエスさまは混乱を避けるために、岸辺に寄せられていた二艘の小舟の一艘に乗り込んで、その所有者である漁師に頼んで、岸から少し漕ぎ出すように頼んだのです。その漁師こそ、後に「ペトロ」と名付けられるようになった「シモン」でした。イエスさまは、その舟の中から岸辺に群がる群衆に向けて、神の国の福音を語られたのです。静かな湖畔の朝、湖を渡って伝わってくる主イエスのみ言葉は、一人一人の心の深みによく染み渡ったと思います。

イエスさまは、話し終わった時、漁師シモンに語ったのです。「沖へ漕ぎ出して、網を降ろし、漁をしなさい」と。今まで黙ってイエスさまの言うなりに従っていたシモンでしたが、さすがに、もう我慢できないと思ったのか、「先生、わたしたちは夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした」と言いかけたのです。無理もありません、シモンは疲労困憊していました。彼はこの湖の漁師で、これまで数十年漁をしてきましたが、おそらく、夜通し(徹夜で)漁をし続けたことはもちろん、一匹の魚も捕れなかったなどということはなかったことでしょう。ところがその夜に限って、何度網を打っても一匹の魚も捕れなかったのです。彼にとっても、仲間の漁師にとっても、どれほどショックなことであったか分かりません。彼らの漁には生活が懸かっています。一匹の魚も捕れないということは、その日の収入がゼロというだけではなく、自分たちの食べる分さえないということです。それ以上に彼らを打ちのめしたのは、長年漁師をしてきた自信と誇りが打ち砕かれたことです。

最初、イエスさまがシモンたちを見たとき、彼らは舟から岸に上がって、「網を洗っていた」(2節)ところでした。網を洗うという作業は、魚が網にかかって魚のうろこや匂いを落とすためにすることです。ガリラヤ湖は淡水ですから、塩気を洗い落とす必要もないことです。一晩中、何十回、何百回も網をうって何も捕れなかったということは、網は洗う必要がなかったということです。それにもかかわらず、無心に網を洗っていたということは、彼らの失意の深さを表しているのではないのでしょうか。彼らは、何

も考えずに、いつものようにただ惰性で、無意味なことを繰り返していたのです。

そういう時というのは、私たちにもあるのではないのでしょうか。せっかく一生懸命に徹夜で頑張ったのに、無駄だった、努力が実らなかった。結果を出せなかった、という経験は皆さんにもあると思います。そういう時、私たちも虚しさに打ちのめされ、深い失意の中で、深く考えることもなく、惰性的な生き方に流されてしまうことがあるのです。そういうシモンの姿をイエスさまは、じつとご覧になって、近づかれ、声をおかけになったのではないかと思います。こういう時、たとえ善意からであっても、「しっかりしろ」とか、「頑張れ」と言われても、あまり励みにならないものです。時には、逆効果になってしまうことさえあります。

イエスさまは、黙ってシモンの舟に乗り込んで、少し漕ぎ出すように頼まれ、舟の中から、み言葉を語られたのです。そのみ言葉は、岸辺の群衆に向けて語られたものでしたが、シモンは同じ舟の中の、一番近いところで、イエスさまのみ言葉を聴くことになったのです。話し終わったあと、イエスさまは、またシモンに言われました。「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と。いつものシモンだったら、このイエスさまの言葉にどんな反応を示したのでしょうか。おそらく腹を立て、「なんと人使いの荒い人だ。プロの漁師に向かって漁のことで指示するとは何事だ」と。

「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何も捕れませんでした」。こう言いかけたシモンでしたが、彼はなぜか、「しかし」と言葉をつないで、「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と語り、さらに沖に向かって漕ぎ出したのです。そして今まで、一晩中繰り返して、一匹の魚も捕れず徒労に終わったことを、もう一度やってみようという気になったのです。なぜでしょうか。何が彼をこのような思いに駆り立てたのでしょうか。…主イエスが舟の中で岸辺の群衆に向けて語られた「神の言葉」を彼も聴いたからではないのでしょうか。シモンは、最初から主イエスの言葉に、断り切れない不思議な力を感じていました。それが、イエスさまを舟に乗せ、言われた通りに少し漕ぎ出すきっかけになったのですが、舟の中から群衆に語られた言葉を、聞くとはなしに聞いていて、少しずつ彼の心の中に、「神の言葉」に対する信頼が生まれ、イエスさまの言葉に賭けてみよう、という思いが湧いてきたのではないのでしょうか。

「…しかし、お言葉ですから」。シモンのこの言葉の背後には、主イエスの言葉の力に対する抗しがたい信頼の思いが込められているように思います。「お言葉ですから網を降ろしてみましよう」。そう言って、言われた通りに、沖へ漕ぎ出して網を降ろしたところが、どうでしょう。夜が明けるまで何度網を打ち続けても、小魚一匹掛からなかったのに、なんと、おびただしい魚の群れが網にかかり、網が破れそうになったのです。そこで、もう一艘の舟にいる仲間に合図して、手伝ってもらい、二艘の舟に捕れた

魚を引き揚げたところ、舟が魚で一杯になり、沈みそうになったというのです。

これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深いものです」と言ったというのです。今まで、イエスさまのことを「先生」と呼んでいたシモンが、ここでは「主よ」と呼び、ひれ伏して「わたしを離れてください」と叫んだのです。「わたしは罪深いものです」と。おそらくそれは、シモン自身、驚くような言葉ではなかったかと思います。今まで、漁師としての自信とプライドをもって、自分の判断や自分の力に任せて、思い通りに振舞ってきた彼が、思いがけない挫折を通して、打ち碎かれ、主イエスの言葉の力とその正しさに圧倒されて、心からイエスを主とあがめ、自分の罪の深さを告白したのです。

「罪」という言葉は、聖書では単に掟や法を破ったり、悪事を働いたことを指すものではありません。神さまのことよりも、自分のことを中心に考え、自分が自分がと、自分を絶対化することです。シモンはイエスさまの言葉の力と恵みの業に圧倒され、しみじみと自分の愚かさや惨めさを思い、自分の「罪」を自覚させられたのです。

「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深いものです」。こう語るシモン・ペテロに、主イエスは言われたのです。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になるのだ」と。これは、「わたしはあなたを離れない。いつもあなたと共にいる。わたしに従って来なさい」という意味です。「人間をとる漁師」とは、さ迷える人々をとらえて「神の国」へと招き導くという、イエスさまご自身の務めです。イエスさまはそのために、貧しくなられてこの世に来られたのです。イエスさまは、シモン・ペトロに向かって、「あなたは、わたしの後に従って、多くの人々に神の国の福音を宣べ伝え、わたしと共に一人でも多くの人々を神の国へと導く者になりなさい」という新たな使命をお与えになったのです。そしてシモン・ペトロは「すべてを捨ててイエスに従った」のです。これが漁師シモンがイエスさまの弟子となったいきさつです。

イエスさまはこのようにして、12人の弟子たち一人一人をお召しになり、神の国の担い手として、お立てになったのです。世にある教会は、このような弟子たちの使命と役割を受け継ぐ者として、主によって召された集まりです。教会もまた、この世の荒海の中で漕ぎ悩み、いくら網を降ろしても一匹の魚も得られないという虚しさの中で、疲れ果て、意気消沈してしまいがちな誘惑に陥りがちです。しかし、そういう中で主イエスは、み言葉をもって私たちを励まし、「沖へ漕ぎ出して網を降ろし、漁をきなさい」と命じておられるのです。この「沖」という言葉は、「深み」を指す言葉です。もっと深みへと私たちを招く言葉です。このような時こそ、私たちはより深く神のみ言葉に聴き従い、祈りを深め、この世の深みに網を投げ入れ、一人でも多くの人を神の国へとお招きする務めに励みたいと思います。

アーメン